

# 子どもの絵あれこれ（上）

川崎 千束

デパートをぶらついていたら、後から、

「先生」と飛びつかれて、驚いて見たら、中学三年生のU子ちゃん。そしていきなり、

「私ね、幼稚園の時に、先生に読んでもらった『なが、いな、が、い、べん、ぎん、の、話』大好きで、今でも何度も読みかえしているの」

母親と一緒にだったので、それきりで別れたのですが、私はほのぼのとうれしかったのが、今もなお胸うちに残っています。

昭和二十七年、私は三島市立西幼稚園の園長として、県学務課の依頼を受け、静岡県東部地区の研究大会を開催し、午前中は保育参観、午後は討議というスケジュールでした。

その午後の部で、小学校教諭から鋭い質問が出ました。

「幼児画には指導がないのか。ヒマワリと言って、貧弱な花を描いていたが、小学校ならその場合、大きなヒマワリの花を実感として捉えさせ、貧弱な表現をする生徒がいたら、ヒマワリの高さと背くらべをさせ、花の大きさと自分の顔とを見くらべさせる。」

この質問に対し、若い教諭に代わって私が次のように答えました。

「その子は、ヒマワリよりも空を、自分の空間の方を、大きく広く感じたのかも知れないし、ヒマワリと言っている、心の中の花を描いたのかも知れない。」

この場合は、それで有耶無耶におさまりましたものの、「幼児画には指導がないのか。」この言葉は尾を引いて、私の心に蟠わたかまりました。

翌二十八年、私は創設の家政大学附属幼稚園に移りました。当時の家政大には、山下俊郎先生をはじめ、心理学・教育学の先生方が揃っていらっしゃいましたが、幼児画に就いての私の心の蟠りわたかまを解くには、私自身が保育実践の場で「木霊の峯」にたどりつくより他に道はありませんでした。

レニングラード就学前教育研究家集団著の「幼児描画指導書」の口絵に掲載されているソ連の幼児画の、多彩で、大胆な表現に心ひかれ、その本を熟読しました。はじめのことばに、

「幼児描画の自然成長論は彼等を慰めてはくれず、この子どもたちの絵の多くは、ふた

つの壁画の家と花を持った女の子というスタンプになり、男の子の絵は一年中、自動車と飛行機で埋められました。いったい子どもたちの思考や興味は、そんなに限られたものでしょうか。事件いっばいの生活がたえまなく、子どもたちの意識の中に押し入ってきます。

自分の力と理解のかぎり、子どもたちはいき／＼とそれに反応し、自分の感情や思考を絵に表現しようとしますが、その為の能力は彼等にはありません。不満が次第に描画への興味を失わせ、無関心へ、ときにはあらゆる表現活動への憎悪へとみちびきます。

生活の観察による、芸術的発達と小さい子どもたちの力に応じたその表現手法を教えるための、もっともよい道を探すことです。

子どもたちの創造的な思考・イニシアティブ、ファンタジーの発達に全力をそそぎ、たて線、よこ線、かこみ線、これらの手法を利用して、いくつかの物の簡単なフォルムを描き出すことができます。これらの絵は各国幼児画審査員の賞を得ました。」と、あります。

右のソ連の描画指導の流れを汲む芸術教育研究所発行の各年令の実践記録も読み、夜の講義にも通いました。が、講義が進むにつれ疑問が頭をもたげてきました。

その手法は、モチベーションをしっかりとさせ、描こうとするものを観察、表現技法は

なるほどと感じながらも、寫生的な部分が多く、「全員の子が描けるようにする」が目的となっています。

。子どもたちの個性はどう考えられているのか。

。描きながら、子どもの気持の推移は、どう扱われるのか。

同じ頃、幼児画に深いかかわりを持たれている故木下繁先生は、

「幼児の絵の指導は、兎の耳は長いから、長く描きましよう、というのなら容易たやすいが、幼児が対象をどう捉えるか、大人がそれに共鳴する。そこが出発点である。尚描く技法よりも、まず色の美しさを感じさせる。」

木下先生は実際に、空缶に三・四色のポスターカラーを容れ数個小さい穴をあけたものを、広い部屋に敷かれた紙の上を、子ども達が自由にころがす。缶から色がこぼれ出て線となり、交錯する色の線が織りなす妖しきまでの美しさ。

紫式部日記は、中宮彰子の御出産の叙述ながら、近うさぶろう女房たちから参内する上達部・殿上人に至るまで、その服装と色合いを記しています。私はこれは紫式部の強気に依るものか、それとも想像か、と疑問を持ったことがありましたが、色を視点として源氏物語を見るなら、実に色彩ゆたかで、服装の色によってその人物が深く印象づけられます。

たとえば、紫の上は、紅梅のいと文浮きたるに葡萄染の御小桂うづきで、匂い立つ美しさが想像され、夕顔は白き袷にうす紫色のなよやかなるを重ね、であわれ深さがしのばれます。

家政大幼の三歳児たちが厭きずに遊んだものにハシャボン玉▽があり、それは円の輪郭の中に水を塗り、乾かぬうちに、ポスターカラーの三原色を、絵筆でポタリポタリたらずと、色が混り合って思わぬ美しさ（子どもたちの云うシャボン玉）が浮かび出ます。

私は、木下先生の幼児画の理念に傾斜し、心の蟠りが解けはじめました。折しも、アジア各国の幼児・児童の描画展が海外で催されて、その批評に、「日本の子どもたちの絵は技術は群を抜いているが、夢見るような情感に乏しい」とあり、ここに至り、私の目からうるこがとれました。

絵に固執して、何故四つに組んでいたのだろうか。

レニングラードの指導書のまえがきにも

「事件いっぱいの生活がたえまなく子どもたちの意識の中に押し入り。」

とあるように、いきいきとした多様な子どもたちの生活こそ、基本となるべきで、そのこととは自分はよくよく心得ていたものを。

私自身、年令と共にデリカシーが稀薄になって、子ども心に共鳴共感し、ということが文字の上だけで肯定してはなからうか。これは保育者として、致命的なかなしさです。

「子ども」ころの感情世界を、子どもの体験のままに描き出している、と漱石の絶讃。」  
和辻哲郎も、「不思議なほどあざやかに子どもの世界が描かれ、大人の見た子どもの世界でもなければ、大人の子ども時代の記憶というごときものでもない、まさしく子どもの体験した子どもの世界である。」

二大家の絶讃される、中勘助の「銀の匙」を、文章の美しさ繊細さに酔いながら食べるように読みました。

——つづく——

(元東京家政大学附属幼稚園)

